

氏 名	うゝ いぐるー えどわーど VIGREUX Edouard
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 4 7 2 号
学位授与の日付	平成 19 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 3 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	Details in SHINOHARA Kazuo's legacy:From architectural towards literary (篠原一男の住宅作品におけるディテールに関する研究-建築的ディテールから理念的ディテールへ-) (主査)
審 査 委 員	教授 石田潤一郎 教授 森田孝夫 教授 日向 進 准教授 西田雅嗣

論文内容の要旨

本論文は現代日本の建築家、篠原一男の作品の分析と作品の受容の検討を通して、篠原一男の住宅論の中核にあった日本建築の伝統性を彼の作品の「ディテール」の中に議論する研究である。論文は、序論、篠原一男の住宅作品の系譜を分析する第 1 章、彼の住宅作品の「ディテール」を考察する第 2 章、篠原一男の住宅作品の伝統性の指標化を試みることで作品受容を考える第 3 章、そして結論からなる。

序論では、篠原一男の住宅作品と、彼が著して来た建築の理論が、新しい世代の日本建築の創造に多大な影響を与えた事実を確認し、の篠原一男が英語で著した彼の建築論や作品に関する 1960 年代以降の彼の言説を網羅的に検討する。篠原一男の作品の系譜や創作のプロセスを合理的に再解釈され、彼の作品や理論・言説が「篠原スクール」と呼ばれるムーヴメントを生むに至った理由が検討される。

第 1 章では、新しい日本の近代的アイデンティティーの創造へと向かう転機となった篠原一男の幾つかの住宅作品の空間と意匠の特異性に注意を向ける。彼の「伝統性」の表現が形式的なもののから抽象的なものへと変化するプロセスが明らかにされ、様々な意味レベルにおける「ディテール」が篠原作品の理解にとって重要であることが指摘される。

第 2 章は「ディテール」を扱う。日本の建築観における「ディテール」という建築了解の意味を議論した後、篠原作品における「ディテール」の特異性と重要性を具体的な住宅作品と彼の言説を通して検討し、篠原一男の住宅作品の系列・分類を提案する。本論が言う「ディテール」は、技術的観点も含んだより広い意味での「ディテール」であり、この「ディテール」により、篠原の住宅作品のあり方の中に四つのスタイルを見て取る。

第 3 章は、作家の視点からではなく、社会共同体における篠原の住宅建築の受容を通して篠原作品における伝統という「ディテール」を考える。前衛と称される篠原作品を見る一般大衆の視点における「日本的伝統」の指標を、歴史社会学の方法を援用して、日本建築史の概説書や一般書、総記的書物などの書の中から抽出し、篠原作品の「日本性」の集合的心性による受容の姿の一端として描き出す。批評家の言説、そして建築家自らの言説とも比較し、篠原一男の住宅作品

の中に、三つの異なるスタイルに属する三つの重要作品を指摘する。

結論の章では、言説の面でも具体的意匠や空間構成の面でも、そして「ディテール」の面においても、転機を画す「未完の家」を取り上げる。調査を実際に行い、住み手にインタビューを試みた「未完の家」という一軒の具体的事例を通して、建築家の意図と住み手の受容の問題― 建築家と住み手の相互関係が、建築家の意図を超えて、建築家の領域にだけではなく、社会全体として、社会一般の声をも反映しながら、場合によっては住宅の姿を変えながらも、絶えず新しい日本の現代の住宅像を形成していく―を議論する。他の同時代の建築家とは異なる極めて得意な形で伝統と関係して伝統に発想源を求めた篠原一男が、新しい現代の日本の住宅のアイデンティティを再定義した様の一側面を結論として論ずる。

論文審査の結果の要旨

現代建築家に関する作家論研究は通常、当該建築家の思想や手法を建築家の創作の秘密の解明として、創作への寄与を目的として行われるものが主流である。一方、ある特定の建築家の作品や言説を、それが成立した社会環境の中に定位し、芸術社会学としての研究もあるが、その多くは、作家の意図をあまり重視しない社会決定論的な傾向のもので、建築という分野に固有の問題において前者とは趣を大きく異にする。建築作品が、建築家の一個の作品であり、同時に極めて社会的な存在である以上、上の二つの視点が必要であるのは論を待たないが、この二つの視点から満足のいく形で、特定の建築家を扱った学術研究の数は未だ多いとは言えない。

申請者の論文は、この二つの対極的な視点を、世界的な影響力を持つ現代建築家、篠原一男の住宅作品と言説に持ち込んだもので、第1章が建築家側の創作の視点からの作家論、第3章が社会的集合的な共同体意識の中における篠原作品の意味に当てられ、間の第2章は、両者の視点を同時に含む「ディテール」という、本論文独自の分析視点の提案とその適用という風に構成される。「作家の意図」から「社会的意味」への流れが、「ディテール」と言う本論文独自の観点が媒介して論文全体をまとめある。この全体構想は、研究の進捗に従い徐々に形成された考えであり、研究着手時から既に十分に練られた構想ではないことは、この流れが必ずしも明快に論文に読み取れる訳ではないことから理解されるが、公聴会における申請者の発表や質疑応答からは、申請者が十分にこの点の意義を認識していることが知れた。本論文の建築論的価値の一つはこの点にある。

建築の分野における一般的意味よりも「ディテール」という概念をより広くとらえ、最終的には第3章において申請者の言う「ディテール」は「理念的ディテール」という概念として提示され、論文ではこれが、篠原作品への社会的視点の適用を可能とする。そしてこの「ディテール」は、建築家自身が終生固執した「日本建築の伝統」を巡って議論され、建築家自身に特有の「伝統観」を社会的広がりの中においても把握する。こうした論理が、「現代日本建築に見る日本の伝統」といった、ある意味では通俗的なテーマに対して、この通俗性から見事に逃れ、本論文が建築論・建築史としての一定の価値を持つことを可能にしたといえる。

特に第3章における「伝統性の指標」の抽出は、日本の伝統性の具体的で絶対的な表象を期待するなら、一見極めて素朴な方法論と見えるが、申請者の意図がそうした唯一絶対真理としての伝統の抽出にあるのではなく、社会決定論的な、つまり集合的心理としての伝統にあり、これと

の比較で、社会の受容の問題として篠原作品の伝統性を論じるところにあることを知るとき、社会学的方法論の適用である第 3 章は、十分に学術的価値を認めることの出来る論考である。十分に明快にこの目論見を論文中に読み取ることは容易くはないが、申請者のこうした意図は公聴会での回答からも知ることはできた。

「形として具体的に表象する伝統ではなく、抽象化された象徴的な伝統」と言う結論自体は既に言われることでもあるが、従来の見解が基本的には作家側からの一方的な視点により形成されたものであることは、本論文の第 1 章に既にこの結論が見られることから分かる。しかし本論文は、このことを最初にも述べた様に続く第 2 章、第 3 章において、従来ほとんど検討されることのなかった社会的視点、受容の視点から「ディテール」という独自の観点から多面的に検討したもので、この点に本論文の学術的価値を見いだす。論文の最後、結論の中に紹介された、篠原一男の承認のもと、住み手の意向により完全に姿を変えてしまった篠原の初期の住宅作品の紹介は、確たる結論を引き出してはいないが、本論文が有する最も重要な価値を暗示する。